

「富雄白庭と神武天皇金鷄伝説」

担当:3丁目 井守徳弘

予定コース

近鉄けいはんな線学研登美ヶ丘駅—白庭台駅—長脛彦本拠地跡—鳥見白庭の碑—富雄川—鷄山・金鷄発祥伝説地—長弓寺・伊弉諾神社(昼食)—鷄邑顕彰碑・神武天皇聖蹟碑—天忍穂耳神社夫婦塚・御炊屋姫墓伝承地—王龍禅寺・鷄神社—近鉄大阪線富雄駅—近鉄大阪線学園前駅
(約10km・午後4時ごろ解散予定)

●神武東征

『日本書紀』によると 神日本磐余彦天皇(カムヤマトイワレビコ、以下神武という)は45歳の時、天孫が降臨されてから179万2470余年になる。しかし遠くの地では争い事が多く、塩土老翁(シオツツノオジ)に聞くと「東の方に美しい国がある。そこへ天の磐舟に乗って、飛び降りた者があるそこに行つて都をつくるにかぎる」と云い。皇子たちも「そのとうりだ」と申された。この年は太歳(たいさい)甲寅(きのえとら)である。この年の10月5日に天皇は自ら諸皇子・舟軍を率いて、日向(九州・宮崎)から東征に向かわれた。

そして、筑紫宇佐から安芸国(広島)、吉備国(岡山)を経て、難波の岬に着いた。川をさかのぼって、河内国草香(日下村)の白肩津(しらかたのつ、東大阪市日下)に着いた。

皇軍は竜田に向かったが、道が狭くけわしいので、引き返して、東の生駒山を越えて内つ国に入ろうとした。

その時に、長髓彦は「わが国を奪いにきた」といい、孔舎衛坂(石切付近)で戦った。

この時、神武の兄の五瀬命は「我々は日の神の御子だから、日に向かって(東に向かって)戦うのは良くない」としたが遅く、腕と脚に矢が突き刺さり負傷した。そして、とうとう紀伊で亡くなられました。

神武の軍は、紀伊から熊野に回り、八咫鳥の案内で大和の宇陀に至った。

こうしてヤマトまで攻め込んだ神武は、長兄の五瀬命の命を奪った宿命のライバル、長髓彦と対峙し一進一退であったが、天皇の弓にとまった金鷄の助けもあり勝利することになります。

長髓彦は神武の元に使いを送り、自らが祀る櫛玉饒速日命(クシタマニギハヤヒ)は昔天磐船に乗って天降ったのであり、天津神が二人もいるのはおかしいから神武にむかって、あなたは偽物だろう、と言った。

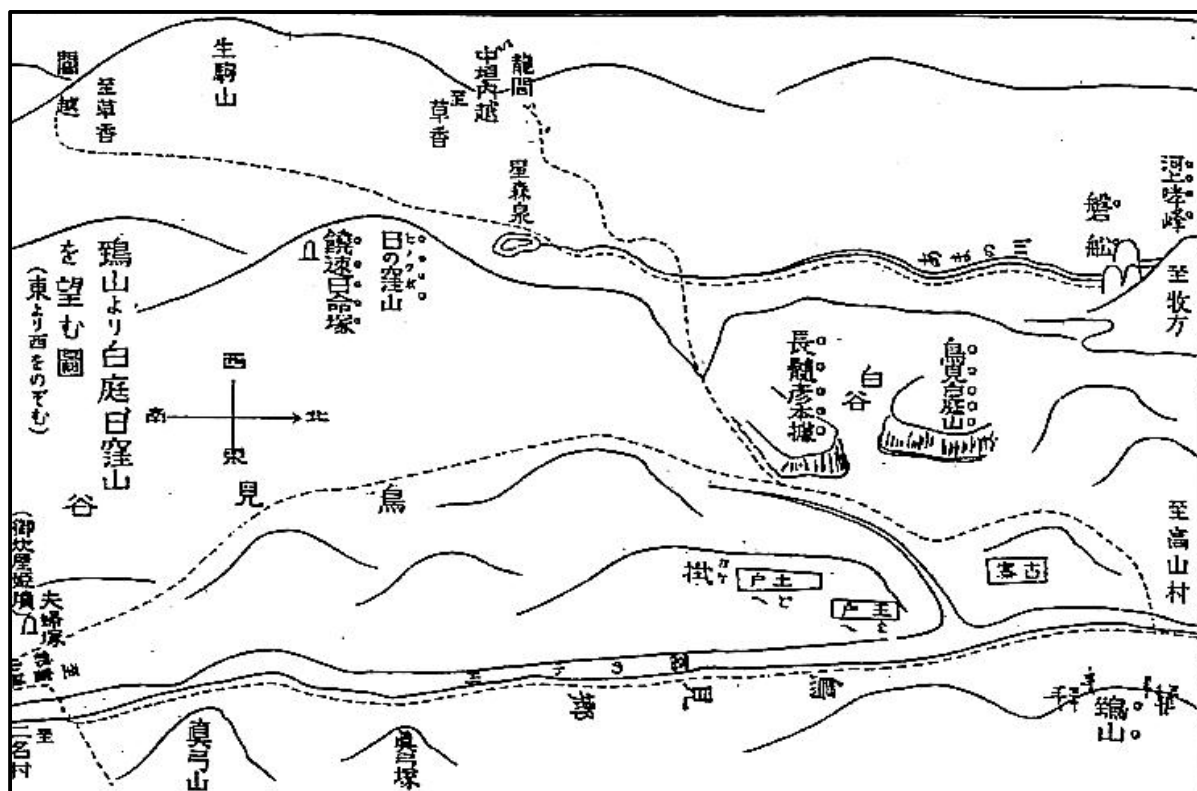
神武と長髓彦はどちらも本物であることがわかった。

しかし、長髓彦はそれでも戦いを止めようとしなかったため、饒速日命は長髓彦を殺して神武に帰順した。

神武はこれをほめて寵愛された。これが物部氏の先祖である。

このようにして荒ぶる神たちを服従させ、畝火の白檮原宮(畝傍山の

東南の檀原の宮)で即位されました。(皇紀元年)
 今日、この神武天皇の伝承地を歩きます。



鷓山(東)より白庭・日窪山(西)を望む図(生駒市史より)

●長髓彦本拠地跡

長髓彦とは

『古事記』…那賀須泥毘古・登美能那賀須泥毘古・登美毘古

『日本書紀』…長髓彦

『先代旧事紀』…長髓彦

とよばれる。

ヤマト地方で神武東征に抵抗した豪族の長として描かれている人物です。

この長髓彦は登美夜毘売(トミヤヒメ)、あるいは三炊屋媛(ミカシギヤヒメ)ともいう自らの妹を、天の磐舟で、河内の河上の哮峰(いかるがのみね)白庭山に降臨した饒速日命(ニギハヤヒノミコト)の妻とし、仕えていました。

『先代旧事紀』では「天祖、天璽(てんじ)、瑞宝十種を以って、饒速日尊に授く、則ち、この尊 天祖御祖(てんそみおや)の詔(みことのり)を受け、天の磐船(いわふね)に乗り天降り、河内国河上の哮峰(いかるがみね)に座(ま)います。則ち遷(うつりて)大倭国鳥見(やまとのくにとみ)の白庭山に座す。そより大倭国鳥見(やまとのくにとみ)の白庭山に移った」とあります。

この長髓彦本拠地跡の碑は東の白谷団地となっている付近から移しています。

●鳥見白庭山の碑

大正3年(1914)、生駒郡北倭村(現在、生駒市)に「金鷄会」が発足し、日本神話に登場する土地を 聖蹟として顕彰する立場から、地元の聖蹟を特定して盛んに顕彰に努めた。

鳥見の「とみ」は富だけでなく鳥見・登美・登弥・迹見などと、いろんな字が充てられてきた。鷄から変化したともいわれている。

『日本書紀』垂仁紀35年10月条に「倭の迹見池を作る」とある。

また、神武天皇12月4日条に、「鷄の瑞兆から鷄邑」としたや、この「鷄がなまって鳥見(とみ)になった」とある。

『行基年譜』天平3年条に「大和国添下郡登美村」とあり、北登美ヶ丘はこの字を用いています。

『延喜式神名帳』の添下郡10座のうちに「登弥神社」が見える。

饒速日命が降臨し後本拠地をこの白庭山に移した。また長髓彦も、ここを本拠地としていた。

●富雄川

生駒市高山町の高山溜池に発し、南へ向かって矢田丘陵に沿うようにして流れ、生駒郡斑鳩町と安堵町の境界で大和川に合流する。

古代「富雄川」は「富の小川」といわれていた。

斑鳩やとみの小川の流れこそ絶えぬ御法の始なりけり〔新千載集〕

いかるがや富の小川の絶えばこそ我大きみの御名忘れめ〔拾遺集〕

いかるがの止美のをがはのたえばこそわがおほきみのみなわすらえめ

〔上宮聖徳法王帝説〕

●神武天皇聖蹟 鷄邑顕彰碑

紀元2600年(昭和15年) 記念に建てられたものである。

岩波書店版『日本書紀』の「鳥見」の注には、「奈良県生駒市の北部から奈良市の西端部にわたる地域。この地は続記、和銅7年11月条に登美郷として現われ、以後平安・鎌倉・室町・江戸の各時代を通じて鳥見庄または鳥見谷の名を伝え、その地内を貫流する富雄川も、もと富河または鳥見川と呼ばれていた」とある。

昭和十年代前半に、この鷄邑の本家争いがくりひろげられたそうである。生駒市上、奈良市富雄、桜井市外山、吉野郡川上村など「鳥見」という地名をもつ奈良県内の各地が名乗りをあげた。

昭和15年、この年神武天皇即位二千六百年を記念して「紀元二千六百年奉祝会」という組織が作られ、各地で記念行事が行われた。

その一環として文部省は同会からの委託を受け、文献と現地の伝承を基にして神武天皇の旧蹟を特定する、という現地調査を行った。

この文部省の調査で、生駒市上地区(旧北倭村)が「御聖跡」の指定を受けた。この記念碑はその指定に基づき、翌16年、生駒市上、奈良市富雄両地区の境界線付近に建てられたのである。

戦後、進駐軍からこの碑の取り壊し命令が来た。各地で忠魂碑や銅像などが撤去された。村人達は、碑を守ってきた「金鷄会」を解散するかわりに、碑の存続を願い出て今日に至っています。

●「金鵄発祥之処」という碑と鷺山



月岡芳年「大日本名將鑑」より「神武天皇」。明治時代初期の版面

皇弓の弾(ゆはず)にとまる金鵄は、明治23年(1890)以来金鵄勲章の起源となった。

金鵄勲章は、戦前わが国において軍人軍属で武功ある者に与えられた勲章である。功一級金鵄勲章をはじめ、功一級から功七級まで7種があった。金鵄勲章は、神武天皇が奈良の橿原でご即位されてから、神話時代を含め2550年目に当たる明治23年に、神武東征の故事(金色のとびが神武天皇の御弓にとまり、その輝きに長髓彦の軍勢の目がくらんで降伏したという皇軍勝利の故事)にちなみ、武功卓抜な者に与え、天皇の威烈をあきらかにし、もってその忠勇をご奨励されるために制定されたものである。昭和22年に全部廃止された。



金鵄勲章

尋常
小學
國語讀本 卷五
文部省

五 金鷄勳章

「をちさん、勳章がふえましたね。一番こつちは金鷄勳章でせう。」
 「あ、今度の戦争でいたいた。」
 「金の鳥がついてゐますね。」
 「これは鷄だよ。それで金鷄勳章といふのだが、鷄のついてゐるわけは知つてゐるだらう。」



「はい、え。」
 「話して上げようか。」

「むかし神武天皇がわるものどもをごせいばつになつた時、わるものどもが強く、おこまりになつたことがある。其の時一天にはかにかき曇つて、ひようがひどくふり出すと、金色の鷄が一羽とんで来て、天皇のお

弓の先にとまつた。鷄の光がまるでいなびかりのやうで、わるものどもは目を明けてゐることが出来ず、おそれてみんなにげてしまつたさうだ。其のいはれて、戦争の時、大きな手が



らを立てた軍人に下さる勳章に、金の鷄をおつけになつたのだ。
 「此の勳章には功一級から功七級まであるをちさんののは、」
 「をちさんのは功七級だ。」
 六 鯉のぼり
 ゆふべの雨がはれて、青葉の上に日が氣持よくてつてゐます。さをの先の矢車ががら

●真言律宗真弓山 長久寺本堂(国宝)

長弓寺の創建については、『長弓寺縁起』によると奈良時代に息子の流れ矢に当たって死んだ豪族の真弓長弓(たけゆみ)を悼み聖武天皇が行基に開かせたと伝わり、後に藤原良継(よしつぐ)が堂塔を整えたとされる。盛時には塔頭が20院あったとされるが、現在は4坊が残るのみである。創建についてはいくつかの説があり、定説はありません。

本堂は、棟木に墨書が残っていて、鎌倉時代の弘安2年(1279)の建立である。本尊は重要文化財の十一面観音です。

真言律宗の祖・叡尊(1201～ 1290)によって再興されたものである。

真言律宗は真言密教の一派で、総本山は西大寺です。生駒宝山寺は大本山です。岩船寺や浄瑠璃寺・般若寺なども真言律宗です。

長弓寺本寺には住職がなく、4つの塔頭が輪番制で本堂を護持しています。右側(東)の薬師院、左側(西)には円生院、法華院、宝光院があります。

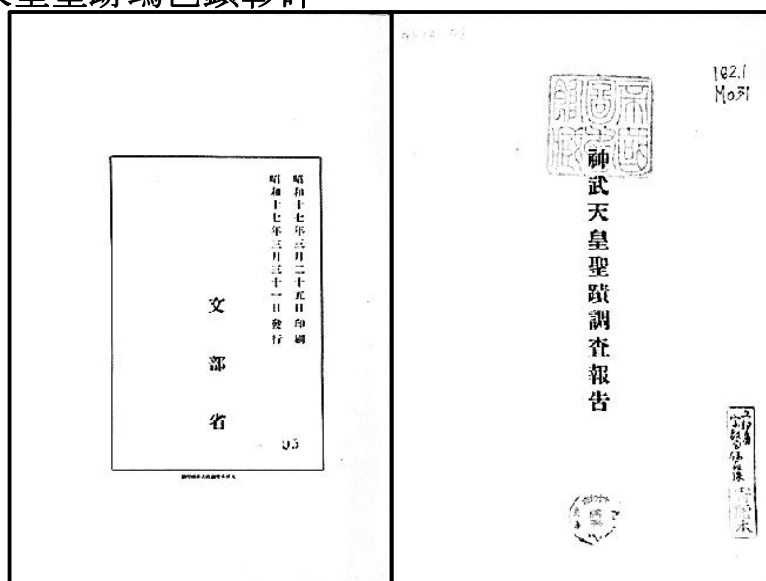
長弓寺にはかつて鎌倉時代建立とされる三重塔があったが、昭和9年(1934)の室戸台風で長弓寺は本堂の屋根が大破するなどの大きな被害を受け、三重塔の二層・三層は早くに失われていたが、初層部分のみが実業家の売却をへて、門と鐘楼も合わせて東京都港区の高輪プリンスホテルに移設された。

●伊弉諾神社

聖武天皇勅願による長弓寺の守護神として建立せられ牛頭天王社と称せられたが、神仏分離の明治新政にあたり現在の伊弉諾神社名に変更された。祭神は伊弉諾尊(配祀)素戔鳴尊 大己貴尊。

平安時代前期の貞観元年(859)正月27日には神階を従五位下から従五位上と『三代実録』に記述され、『延喜式神名帳』には伊射奈岐神社となっている。

●神武天皇聖跡鵜邑頭彰碑



昭和17年(1942)の文部省『神武天皇聖蹟調査報告』

昭和17年(1942)の文部省『神武天皇聖蹟調査報告』では、
「神武天皇聖蹟鵝の邑は、奈良県生駒郡にあつて、その地域は北倭
(きたやまと)村および富雄(とみお)村にわたる地方と認められる。
『日本書紀』によれば、鵝の邑はもと邑の名を長髓(ながすね)といい、
神武天皇はすでに諸族を平定し、ついに戊午(つちのえうま)年：
(即位前三年、紀元前六六三)十二月皇軍を率いて先に孔舎衛(くさゑ)
の坂において天皇を拒んだ長髓彦(ながすねひこ)の軍を討伐したと
ころである。

はじめ皇軍は苦戦を重ねたが、ときにたちまち天が曇って氷雨(ひさめ
:霽)がふり、金色の不思議な鵝(とび)が飛んできて天皇の弓の「弓
耳」(はず:一字)にとまった。その鵝の光は稲妻のように照り輝いた
ので、賊軍はみな目がくらんで戦うことができなくなりました。
こうして時の人は皇軍が鵝の瑞兆を得たことにちなんで、長髓の邑の名
をあらためて鵝の邑と名付けたが、後に訛って鳥見というようになった」
とある。

碑の表面には、「神武天皇聖蹟鵝邑顕彰碑」
裏面には、「神武天皇戊午年(つちのえうまのとし、西暦紀元前六六三)
十二月皇軍ヲ率(ひき)キテ長髓彦ノ軍ヲ御討伐アラセラレタリ時ニ金
鵝ノ瑞(しるし)ヲ得サセ給ヒシニ因リ時人其ノ邑ヲ鵝邑ト称セリ聖蹟
ハ此ノ地方ナルベシ」とある。

●天之忍穂耳神社

葦原中国平定の際、天降って中つ国を治めるよう天照大神から命令さ
れるが、下界は物騒だとして途中で引き返してしまふ。建御雷神(たけ
みかずち)らによって大国主から国譲りがされ、再び忍穂耳に降臨の命
が下るが、忍穂耳はその間に生まれた息子の瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)
に行かせるようにと進言し、瓊瓊杵尊が天下ることとなった。

●夫婦塚

長髓彦の妹の御炊屋姫命塚といわれています。

●王龍禅寺境内の鵝神社

王龍禅寺の山門を入ると、溪流に沿って苔むした参道が続いている。
300mほど進むと本堂に達する。緑したたる静かな参道には禅寺らし
い風情がある。途中に滝があつて、そこは行場になっている。上手に鵝
神社の小祠がある。

○鵝神社由来記(昭和15年8月5日発行 生駒市史より)

王龍寺古文書ニ依レバ、聖武天皇、此ノ地ニ狩獵セラレ鳥見ノ古跡ノ
衰頽ヲ嘆キ給ヒ鵝神社ヲ再興シ王龍寺モ併セ造ラレシニ戦国争乱ノ間
兵火ノ為ニ焼失セリ。其ノ状延享三(1746)丙寅(ひのえとら)年
ノ寺院本末帳ニ「鎮守鵝之三社、天紙、地神、神武社、(四尺ニ六尺、
花表一間ニ八尺)、神武天皇鵝之瑞(しるし)ニ依テ位ヲ保チ世ヲ治メ
給フ依テ之ヲ鵝谷ト號ス神武四年天下ニ詔ヲ下シ鵝之靈社ヲ鳥見山中

ニ立ツ高祖天神を郊祀(古代中国で、天子が郊外で行った天地をまつる大祀)シ大孝申へ給フレ靈社之地ヲ號シ上小野榛原下小野榛原(カミツオノハイバラシモツオノハイバラ)ト曰く故二後ノ世二名山(ニメウヤマ)ト號ス……聖武天皇ノ勅願ニ依リ二天平七年(735)七堂伽藍寺院多數建立アリ其後兵火ノ為ニ破壊シ纔(わずか)ニ後二奥院一宇相ル」トアリ。

○海瀧山王龍寺縁起(昭和15年8月5日発行 生駒市史より)

又同年代ノ和州添下郡鴉谷ニ名村海瀧山王龍寺縁起ニハ「…鎮守鴉神社ハ地神五代鷓鴣草葺不合尊(うがやふきあえずのみこと)第四皇子人皇第一代神武天皇…鴉ノ奇瑞ハ天照大神ノ感応ナルヲ敬ヒ其所ヲ鴉谷ト號シ給フ、同櫃原ニ都ヲ開キ給ヒ神靈ノ社ヲ鳥見山中ニ建テ、鷓大明神ト崇(あが)メラル云々」。

又大字二名ナル語字ニ関シテハ「鷓大明神ヲ崇(あが)メラル、其地ヲ上ッ小野榛原、下ッ小野榛原ト云フユエ二名山ト號ス。民屋ニアル所ヲ二名邑ト云ヒ傳ヘラル」トアリ。

尚此ノ二名ニ就イテハ寛永十癸酉(みずのととり)仲春ノ古書ニ「二名と云ふ譯は此処を上小野波利原、下小野はり原と云ふ名前二ヶ所有故也」トアリテ此ノ地古代ヨリ金鷓發祥鳥見山中ノ靈蹟ナル事ヲ物語リ、王龍ノ名ノ偶然ナラザル事ヲ察セラル。

●黄檗宗(おうばくしゅう) 海瀧山・王龍禅寺

歴史は古く、聖武天皇の勅願寺院で、往時の寺勢はかなり盛大であったと伝えています。

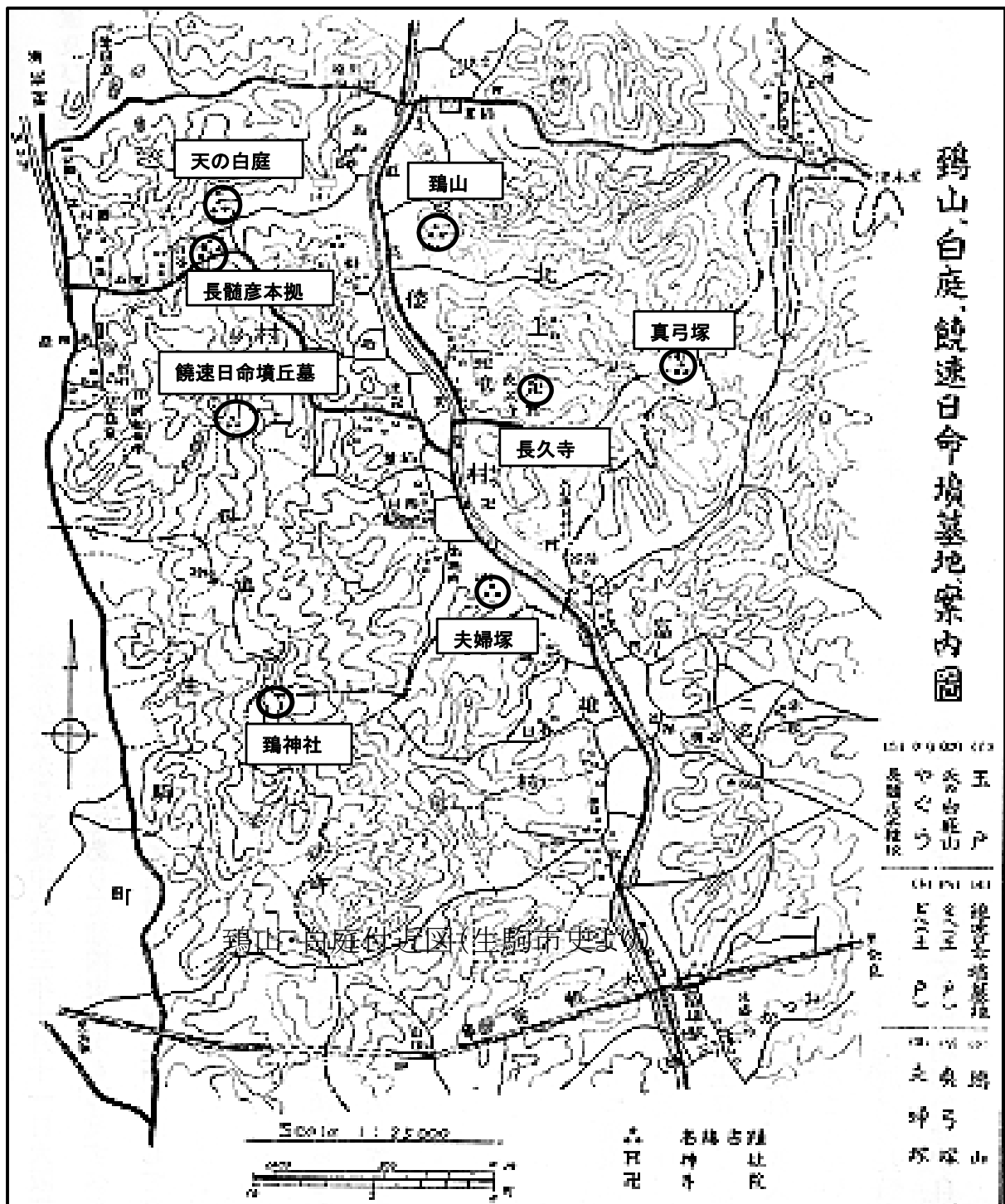
祖・隠元禅師(いんげんぜんじ)の孫弟子、梅谷和尚を招いて菩提寺として再建開山し、山門と本堂がその時に寄進され、今日に至っていませんが、内陣の本尊は、高さ4.5m、幅5.5mもある巨石に刻まれた高さ2.1mの十一面観世音菩薩で、光背形を彫り窪めた中に半肉彫りに刻まれ、下に蓮花台を浮彫りにして、慈愛あふれる優雅な美しさを創り出し、南北朝時代の「建武三年(1336)丙子(ひのえね)二月十二日大願主僧千貫行人僧千歳」の銘があります。

また、本尊に向かって右脇にも、高さ1mの不動明王が刻まれて、銘は、文明元年(1469)十月になっています。

これらの像はこの地区に残る数少ない磨崖仏の一つで、中でも十一面観音立像は南北朝時代の様式をよく伝える貴重なものであります。

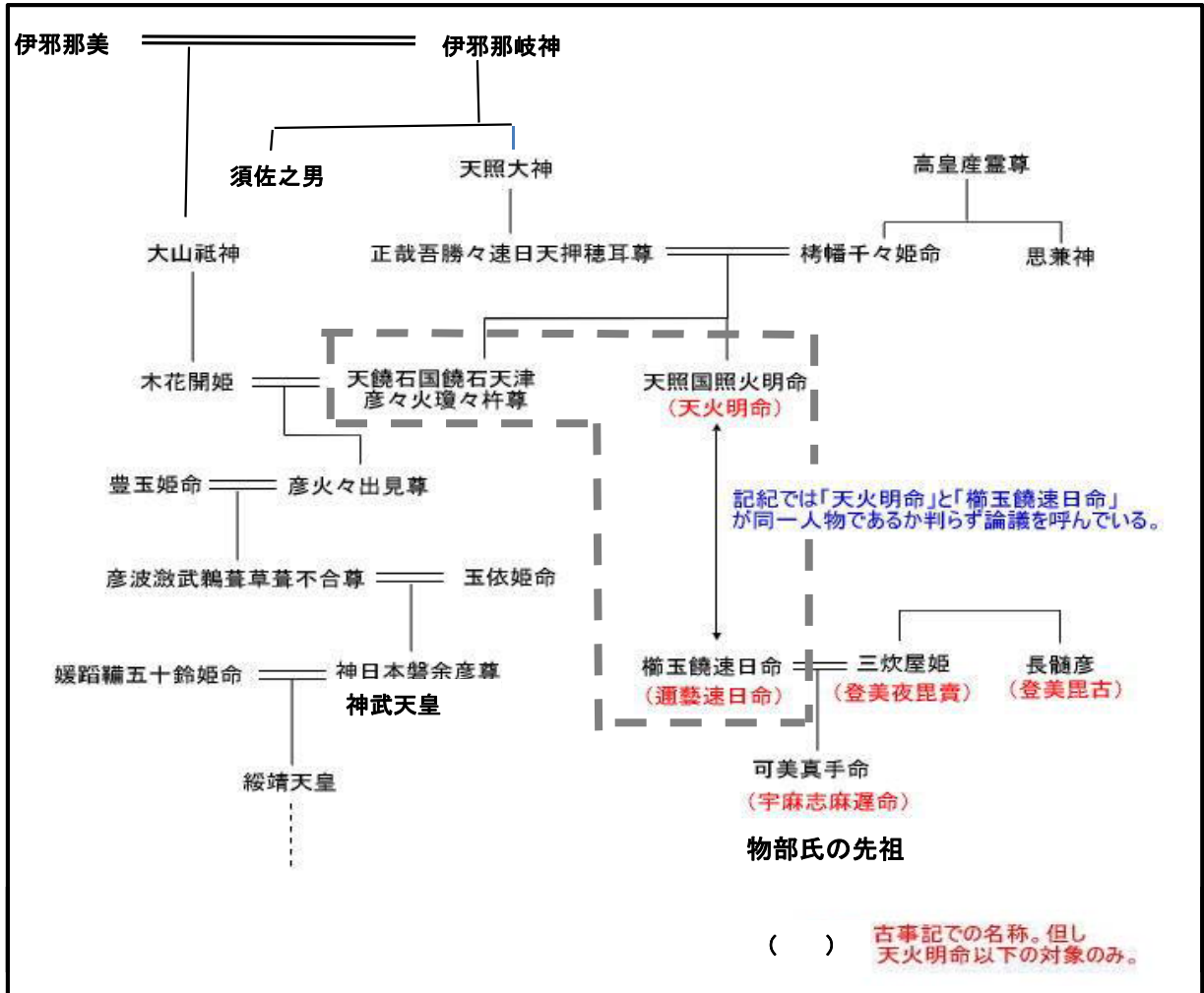
王龍禅寺の本堂の裏へ廻ってちょっとした広場へ出ると、王龍寺境内の裏門の脇に、今も沢山葉が繁る「ヤマモモ」の大木が植わっています。雌(め)株で樹高約11m、主幹の内部が既に朽ちて空洞になっていますが、目通り約2.7mの堂々とした大木です。側幹が3本あって、その最大木は、目通り(地上高1.2mで測った樹木の幹の周長)約1.7mです。樹幹の基部での周囲は、約5mほどあり、樹齢約300年で、本堂が再建開山された江戸時代、元禄2年(1689年)以後に庫裏の裏近くに植えられたものと思われます。

昔は、参詣した賓客をもてなすのに、ヤマモモはかけがいのない果物であったとか。なお、昭和54年5月14日奈良市指定文化財です。

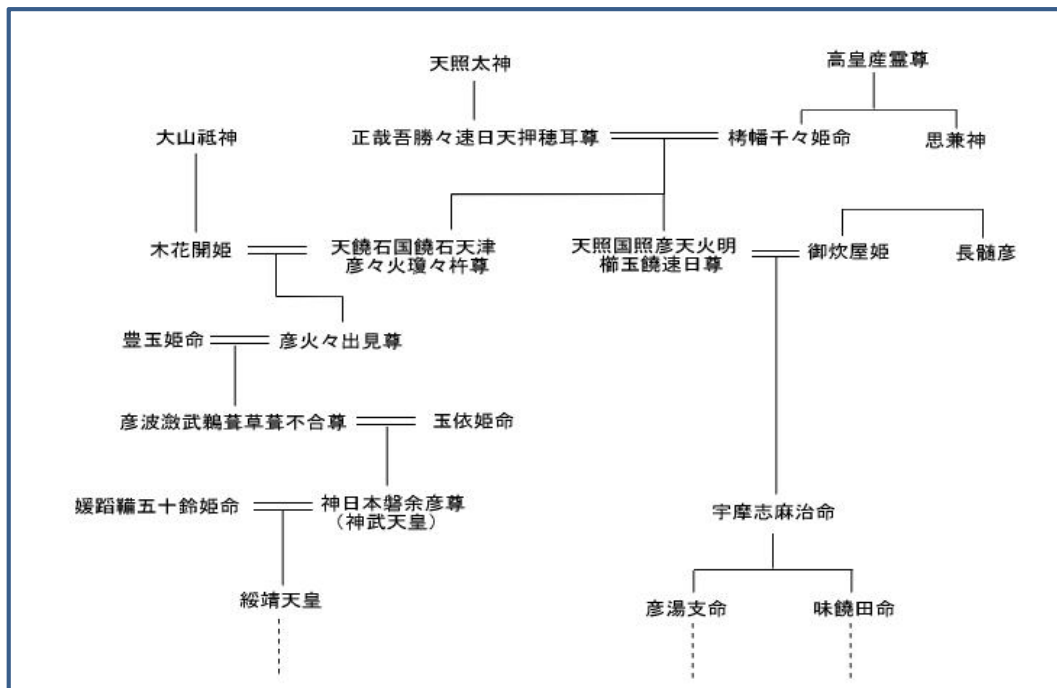


鶏山、白庭、饒速日命墳墓地案内図
 (昭和15年8月5日発行 生駒市史より)

『記紀による神々の系図』



『旧事本紀』による神々の系



●参考文献

日本書紀・上 講談社学術文庫 宇治谷孟 昭和63年 (株)講談社
日本書紀・上 坂本太郎他校注 1984年 (株)岩波書店
古事記・中・下 講談社学術文庫 次田真幸 1995年 (株)講談社
生駒市史 資料編 I 生駒市誌編纂委員会 昭和46年 生駒市役所
日本の神々 鎌田純一・上田正昭 2005年 大和書房
神武天皇御東遷聖蹟考 勝井純 昭和12年 文雅堂
歴史読本5巻12号 2008年 人物往来社
先代旧事本紀 卷第7 天皇本紀 2008年 人物往来社
尋常小学校 国語読本 卷5 大正版 文部省

(以下メモとして活用ください)